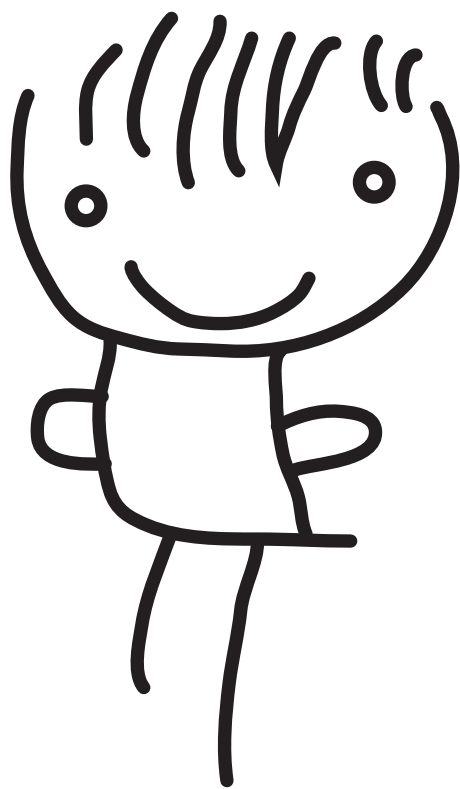


京助くんは
今日も考える



京助くんは今日も考えるープロローグ

これまで、小説「妄想アマガエル日記」やエッセイ「つぶやき」を空いた時間に書いてきた。

小説「妄想アマガエル日記」は、まったくのフィクションで、エッセイ「つぶやき」は私が思ったことを書いたものであるが、最近、その両方を合わせた感じで書いてみたくなってきた。

つまり、フィクションなんだけど、実際の現実のことを盛り込んで書くというものである。

小説「妄想アマガエル日記」でも季節やカエルの生態、種類の特徴などに関する知見を盛り込んではいるけど、やはりあれは妄想の世界の話であるから、やや現実とは違う感じがある。

また、エッセイ「つぶやき」では自分の思ったことを書くから、書くことが限られる。

そこで、小学1年生の男の子の視点で、身近な自然のことをあれやこれやと書いてみようと思う。これを読んで、身近な自然に対して不思議に思ったり、それをどうにか調べてみたいと思ったりする人が、一人でも増えてくれたらいいなと思う。

また、私としては、昔の自分と今の自分の対話みたいなものかもしれない。

さて、また空いた時間にこの小説を書いていこうと思う。今のところ、何を書くかはまったく決めていないのだけれど。

豊田ホタルの里ミュージアム

学芸員 川野敬介

第一話 水

「やべ〜、寝坊した!!」

今朝は家族みんな寝坊してしまった。いつもは「時」分に橋のところで、友達の亮太と待ち合わせをして一緒に行くのだが、もうその時間は過ぎていた。亮太はもう行ってしまっただろう。

「まったく、母さんめ〜」

ブツブツ言いながら、大きなランドセルを左右に揺らしながら走った。

遠くと同じ学校に向かう赤色のランドセルを背おった女の子たちの姿が見えてきた。

おっ!! どうか遅刻はしなくてすみそうだ!

その女の子たちを追い抜いて、さらに走った。

横を小さな川が流れていて、川の流れに負けないように一生懸命に走った。まあ、走るのは得意な方だ。

遠くに亮太の姿が見えた。

おっー!! やつと見えた見えた!!

その時、ふと考えた。

いつも通り亮太と待ち合わせの「時」分に橋のところであって、一緒に学校に行っていたら、今頃あそこにいたんだな。。。でも、もう少しで亮太に追いつく!! ということは、タイムスリップしている感じだ。

そう考えると、途中で追い抜いた人たちは「時」分に出た人、「時」分に出た人とそれぞれ時間に思えてきた。僕は今、時間を越えているんだ!

また、横を流れる川を見ると、そこには当たり前に水が流れていた。

水は一滴を落としてそれが川に入ると、それが前の水を追い抜いたりできないだろう。でも、川の水は一本の紐みたいな感じで繋がっているわけではない。水道から出る水だって、出る時間が少しずつ違うのが集まって出ているわけだけど、一秒後に出た水が一秒前に出た水を追い抜くことはできないだろうから、タイムスリップはできないな。

僕は、今、タイムスリップをしているんだ。

亮太に追いついた。

「はあはあ、追いついたぞ〜」 7時45分に！！」

亮太の肩を掴んで言った。

「おっ！京助、何言ってるだ??」

「よく間に合ったな！！おはよ！」

亮太が振り返って言った。

第二話 虫と光

最近、毎日暑かったけど、今日は朝から曇りだったし、夜になってより一層涼しくなってきた。外はだいぶ暗くなって来て、涼しい風が網戸越しに入ってきて来る。

「今夜は涼しくていいな〜」

網戸を見ながら独り言を言うのと、ω歳上の姉がちょうどリビングに入って来た。

「京助、戸を閉めて、エアコンにしてよ!!」

「え〜。外は涼しいから、エアコンなんてつけなくいいでしょ」

「だって、ほらっ、虫がいっぱい網戸にいるでしょ?」

「あたし、虫が嫌いなよ。」

「ふ〜ん、そう?」

「だって、別に、網戸にとまっていたって入ってはこないでしょ」

外の涼しい風の方がエアコンの風より好きなので、どうにかこのままにして欲しいから反論した。

「まあ、、そうだけど、でも、一匹でも入ってきたら、エアコンにするからね!」

「うん、わかったよ」

そう言っ、近くにとまっていた小さな蛾を軽く握るようにして捕まえて、見つからないに隠した。

姉がいなくなった際に網戸を開けて、その小さな蛾を外にヒョイと逃がした。外は真っ暗になっていた。

その時、ふと考えた。

ところで、なんで虫たちは光に寄ってくるんだろうな〜。

昼間はあんなに光があるのに、じっとして、暗くなって光に寄ってくるなんて、何が目的なんだろう〜??

光に寄ってきたからといって、何かをしているわけでもなさそうだし、光に寄ってこないと生きていけないというわけでもなさそうだし、充電するとかでもないだろうしな。

ん〜ん〜いつたい、なんで光に寄って来るんだろうな〜ん〜ん〜?

そもそも、人が光を作る前はどうしていたんだろう〜ん〜ん〜??

月の光に寄っていつていたのだろうか?

でも、月に向かって虫が飛んで行くとは思えない。人の光がない山の奥とか海の上とかで、月に向かって虫が集まるなんてのも聞いたことないからな〜

いつたい、なんのために、虫は光にこんなに集まるのだろうか?

そもそも、光が好きだったら、昼間なんて光がいっぱいあるじゃないか!! 昼間にいっぱい動き回ればいい。

なのに、昼間はじっとしていて、光を喜んでいる感じではない。。。むしろ、光から避けるように暗いところに隠れる。

考えれば考えるほどわからなくなってきた。

でも、まてよ。。。。

少し前に、朝、学校に行く途中に街灯の下で大きなカブトムシの雄を拾った。喜んで学校に持っていったけど、先生とかに見つかったら逃がさないといけないから、亮太と一緒にゴミ捨て場に行って捨ててあった段ボール箱を拾って来て、その中に入れておいた。

放課後、その箱を開くと、そこにカブトムシの姿はなかった。よく見ると、その箱には小さな穴が開いていて、そこから逃げたようだった。

あの時、あのカブトムシは穴から漏れる光に寄っていつたから、外に出ることができたんだと思う。

そう考えると、光に集まる虫たちにとって、夜というのは大きな段ボールの箱みたいなものかもしれない。出口の穴だと思って

光に集まっているのかもしれないな。

「まったく、ここは出口の穴ではないんだよ。ここはただの網戸なんだ。」

そう虫たちに言っつて、戸を閉めて、エアコンをつけた。

第三話 虫と痛み

僕の家は坂の上にある。

亮太の家に遊びに行くため、自転車でその坂を勢いよく下っていた。

「風が〜あぁ〜 気持ちいい〜」

大きく口を開けて、口いっぱい空気貯めるように下った。

口が風でめいっぱい膨らみ、一気に乾燥した。

あぶない、あぶない。。。こんなバカなことしてたら、口に虫が入るぞ！！、と我に返った。

ビッターー！！！！

「いってえ〜」

額に何か勢いよくぶつかった。

「いってえ〜！！なんなんだ、」

急ブレーキで自転車をとめて、つま先で自転車をバックさせて額に当たったもの確かめた。

すると、そこには、裏返ったカナブンの脚をばたつかせて暴れていた。

「カナブンかい！ー！いつてえ〜なあ〜！ー！ー！」

カナブンを拾い上げ、暴れる様子を見ながら、ふと、考えた。

ところで、虫つてのは、痛みを感じるのだろうか？？

虫には表情がないから、痛いとか、平気とか顔を見てもわからない。

かといって、しゃべれるわけでもないから、痛い！とかも言わないからわからない。虫語でなんかしゃべっているようでもないしな〜。

でも、脚が取れても、痛がってしばらくじっとしているということもないし、壁とかに勢いよくぶつかっても、何事もなかったように飛んで行く。

ん〜〜〜いつたい、虫というのは、痛みというのがないのだろうか？？

でもまてよ。。。。

虫を掴むと、嫌そうに暴れるし、セミとかはギ〜ギ〜鳴くから、嫌なのは嫌なんだろう？？
けど、死んだふりしたり、ダンゴムシみたいに丸まって動かなくなるのもいるからな〜。。。。

ん〜〜わからないな〜。

手に持ったカナブンの体の硬さに感心しながら思った。

虫は硬い体をしているから、人の肌みたいに柔らかくないから痛さを感じないのかもしれない。。。

でも、幼虫はぷにぷにしてて、人の肌みたいに柔らかいから、今度見つけたら、ちよつとつまんでみよう!!!

「今度は君の幼虫を僕のところによこしておくれ。」

そうカナブンに言つて、草むらに投げて、勢いよく自転車を漕いだ。

第四話 根と枝

今は、夏休み。

毎朝、近くの公園でやっているラジオ体操に行かないといけない。

今日も、ラジオ体操を終えて、スタンプを押してもらった。

昼は暑いけど、朝はとても涼しくて気持ちがいい。

夏休みなのに、早起きするのは嫌だけど、朝の涼しい空気を吸うとその思いも消えてしまう。

特に、森の横の小道を歩くときとても冷たくて、いい匂いがする。

僕は、特に朝の森の匂いが好きだ。

雨が降った後の森の匂いも好きだけど、夏のヒンヤリとした冷たい空気が運んでくる森の匂いは格別だ。

だから、森の横の小道を歩くときは、体の中の空気をすべて森の空気に入れ替えようと鼻の穴をめいっばいに広げて、深呼吸する。

「今日もヒンヤリして、いい匂いだ!!!」

森の奥に目をやると、川の流れが大きな木の根を洗い流して、根がむき出しになっていた。

根は木の幹と同じような質感で、同じくらいの太さがあった。

その時、ふと考えた。

木というのは、どこからが根でどこからが幹で、どこからが枝なのだろうか？

土に埋もれている部分が根だとすると、幹の一部も土に埋もれているから、あの部分も根ということになるのだろうか？

でも、根みたいな部分と幹みたいな部分は質感とかほとんど違いはない。

草みたいに、根が茎と違って真っ白いでひよろひよろしていたら、まだわかるけど、木の場合、幹と同じようなのが土の中にある。時折、その土の中にあつた根みたいなのが土の上に出てくることがあるけど、あれは幹と違いはほとんどないように思える。。。

いや、、、それ以前に、根と枝というは違いがあるのだろうか？

根にはひよろひよろとしたのが伸びているけど、枝から葉が出ている。ということは、葉があれば枝で、ひよろひよろしたのが出たら根ということになるのかな???

じゃ、もし、大きな木を綺麗に引っこ抜いて、そのまま元通り、上と下を逆にして、枝の部分を土の中に、根の部分を上に向けてると土の中の枝がひよろひよろとした根になり、根だったところから葉が出たりするのだろうか？

また、土の中にある根の部分というのは、もしかしたら、暗いのが好きで、枝の部分というのは明るいのが好きだとしたら、土の中にある根に光りをあてて明るくしたら、なんか変な動きでもするのだろうか???

森の奥の根がむき出しになった大きな木を眺めながら、ぼくと考えていた。

「いけない、いけない!!」

「こんな、くだらないことを考えてないで、体の中の空気を森の空気に入れ替えなきゃ!!」

「スーーーーハーーーー スーーーーハーーーー (笑)」

第五話 トンボ

今日は亮太の家に昼から行って、テレビゲームをしていた。

そして、亮太が飼っている大きなクワガタを見せてもらった。あまりの大きさにとても驚いた。

最初見た時、それはオモチャかと思うほど大きくて、こんな大きなクワガタがいるのか!ととても驚いた。あれに噛まれたら大変だ!

そして、今は自転車で家に帰っているところだ。

最近は夕方がだいぶ涼しくなってきた。

午後6時を知らせる音楽が学校の方向から流れて来た。

「やばい!急がなきゃ!!」

少し前を太ったおじさんが上下白色のジャージを着て、首にタオルを巻き、汗だくでジョギングしてた。

自転車をめいっぱい漕いで、スピードを上げて、そのおじさんを一気に追い抜いた。おじさんはどんどん後ろに離れていった。

おじさんが見えなくなったところで、頭の上を無数のトンボが行ったり、来たりしてして飛んでいた。

帽子で捕まえられそうだと思ったけど、そんなことをしている暇はなかった。

その時、ふと考えた。

なんで、トンボというのはこんなにずっと飛んでいるのだろうか？

確か、トンボは肉食だ。飛びながら餌となる虫を捕まえるのだろうかけど、こんなにずっと飛んでいる必要があるのだろうか？

鳥とか見ても、枝にとまっていて、餌の生き物が飛んで来たらその時だけ飛んで捕まえるように思うし、チョウのように花と花の間を移動する時だけ飛べばいいと思う。

なのに、トンボはずくと飛んでいる。

そりゃ、餌は食べたいだろうけど、こんなにずっと飛んでいたら、早く腹が減ってしまわないかい？

それよりは、もう少し効率よく、枝とかにとまっていて、餌の生き物がいた時だけ飛んだらいいのではないだろうか???

それとも、ずっと飛んでいないと生きていけないのかな？

前にテレビでサメやマグロはずっと泳いでいないと死ぬと言っていた。あれみたいなもんで、トンボもずっと飛んでいないと死ぬのかな???

いや、、、でも、枝に止まっているところを見たことあるぞ。

じゃ、どうしてあんなに同じところを言ったり来たりして飛んでいるんだろう？

自転車を漕ぎながら考えていた。

ずっと飛んでいたら、それこそ目立ってしまったて鳥とかに食べられてしまうし、、、無駄に疲れてしまうし、、、餌の生き物だつて逃げてしまうよな、、、??

でも、まてよ。。。。

もしかしたら、トンボは飛ぶのはそんなに疲れたりしないのかもしれない。大きな翅をそんなに必死に動かしているようではないし、、、腹は細くて軽そうだし、、

もしかしたら、飛んで少しくらい疲れないと太ってしまったて、飛ぶこともできなくなるのかもしれないな！！だから、こんなに行ったり来たりして飛んでいるのかもしれない。

「さっきの、汗だくのおじさんと同じだな！」

つづく。



続きは当館公式 note (<https://note.com/toyotahotarum/m/m4275aecca18>)
で配信予定です。

京助くんは今日も考える

2024年8月16日 更新

著者 川野敬介

イラスト //

発行者 //

発行所 豊田ホテルの里ミュージアム
山口県下関市豊田町中村 50-3 電話 083-767-0350

印刷 豊田ホテルの里ミュージアム事務所印刷機

